

東方官衙南地区の調査

—第114-9次

1 はじめに

住宅の建て替えにともない、樫原市高殿町で表記の発掘調査を実施した。調査面積は90㎡、調査期間は2002年2月12日から2月19日までである。

本調査地は、現在の高殿集落のなかにあり、藤原宮東方官衙南地区にあたる。また、東二坊坊間路が通る可能性が想定されたことから、それらの検出を主たる目的として、逆L字形の調査区を設定した。掘削は包含層までの大半を重機掘削とし、以下は人力によった。

調査地の層序は場所により一定しないが、西南部では、藤原宮期の基盤層である硬質の暗褐色砂質土の遺構面が認められる。この標高は74.5～74.7mである。これには、土師器・須恵器片が含まれる。その下は、自然堆積層(地山)となり、淡灰色微砂をはさんで、灰褐色砂礫がほぼ全域に広がっている。調査区東北部は、後代の攪乱のため、藤原宮期の遺構面は遺存せず、標高74.2m前後で灰褐色砂礫の地山面となる。

2 検出遺構

検出した遺構は、耕作にともなう素掘小溝を除くと、中世の南北溝と土坑、近世およびそれ以降の井戸、南北溝、土坑などがある。集落にともなう攪乱が著しく、藤原宮関係の遺構はまったく残っていなかった。

東二坊坊間路は、過去の調査例から、北で1°弱西偏する安定する振れをもつことがわかっており、調査地における路心の座標はY=-17,016.0前後と推定される。したがって、その約3.5m東に想定される東側溝がかかる位置だが、削平により消失したものとみられる。

以下、主な遺構について略述する。

SD9510 調査区中ほどにある中世の南北溝。幅2.5m、

深さ0.5mと比較的大きい。底面は平坦で、流水痕跡がある。調査地は高市郡路東二十六条三里二坪の東端にあたり、条里の坪界溝の可能性が想定される。

SK9511 調査区西南部の中世土坑。一見溝状だが、流水痕跡はない。完形に近い土師器小皿数点が出土。

SE9514 調査区東南部にある近世以降の井戸。井戸枠の丸太と気抜き竹筒が残る。途中まで掘り下げ。

SD9515 調査区東端を北流する近世の南北溝。幅1.3m、深さ0.4mで、多量の流水があったことを示している。18世紀の基幹水路であろう。南端部は完掘していないが、護岸の丸太が一部残る。

SK9516 調査区東南隅にある近世以降の大型の土坑。SE9514およびSD9515より新しい。

SX9517～SX9519 調査区東端に並ぶ木桶を据えた3基の土坑。便槽であろう。SD9515、SK9516より新しい。基幹水路SD9515を東の現水路に付け替えたのち、宅地の端に順次設けたものとみられる。(小澤 毅)

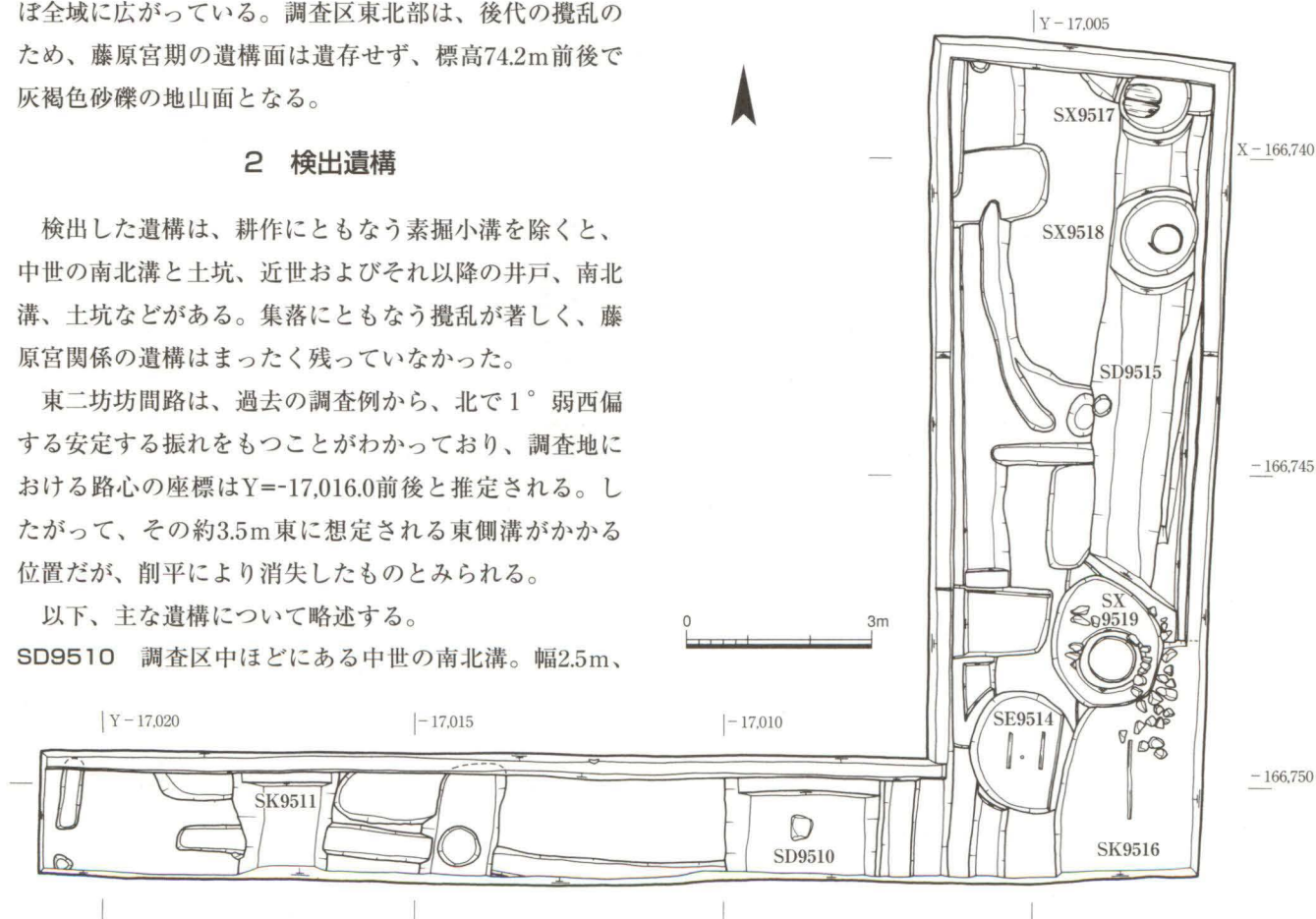


図73 第114-9次調査遺構図 1:120